

# 汎用性をもった読みの力を育む国語科単元の創造

## ～「作家史」と関連させて作品を読み取る～

宮脇 隼

本実践は、子どもたちに生きて働く読みの力を育むことを目的として行ったものである。生きて働く読みの力とは、1つの教材にだけ活用することができるものではなく、他の教材にも活用が可能であり、子どもたち自身が文学作品の読み取りを行う際に手段としてもたせたい力と考えている。また、それは国語科だけではなく、図画工作科や音楽科での鑑賞でも活用される見方・考え方となると考えた。研究方法として、国語科学習を中心に2つの単元を計画し、授業を行った。2つの単元は、詩教材と物語文教材を設定した。子どもたちにとっては、他の文学作品を使い並行読書をしながらの学習経験はあったが、作家の生き方や考え方についての資料と並行して読み取りを行う経験は初めてだった。そのため、戸惑っている様子も見られたが、自分で見つけた関連性から考えをもつことや、友達の考えを聞き、新たな発見をすることで意欲的に作品の世界を楽しむことができた。ただ、関連させるための「作家史」となる資料に関しては、教師から与えたものや教科書にあるものだけであった。資料がない場合に、子どもたちがどのように適切な資料を探し、読みの力を活用していくかは疑問が残る。

キーワード：作家史、宮沢賢治、まどみちお、読みの力、鑑賞学習

### 1. 研究目的

「作家史」と関連させて作品を読むことで、テキストから読み取ることができるだけの情報ではなく、作者の見方・考え方を元にした読み取りを子どもにとって新たな読みの力となると考えた。また、その「読みの力」は他の作品でも生かすことができる汎用的な価値のあるものとなり、今後の読書活動や鑑賞活動に新たな視点をもち作品と向き合う子どもが育つと考え実践を行った。

### 2. 研究方法

本実践で行った「作家史」と関連させた読みは国語科だけで学習し、国語科だけで生かされるものではないと考えている。そのため、本実践では、国語科で「作家史」と関連させた読みを行った後、図工科の鑑賞単元で、国語科で身につけた読みの力（見方考え方）が子どもの中で活用されるのかを検証した。

国語科では、「作家史」と関連させた読みを2つの教材を用いて行った。扱った教材は、詩「せんねんまんねん（まどみちお）」と、物語文「やまなし（宮沢賢治）」である。どちらの作品も教科書教材であるが、この2つの作品を本実践に設定した理由は2つある。

1つ目は、作家の作品が多数あり、子どもたちが他の作品を手に取りやすい状況を大切にしたいと考えたからである。国語科では、並行読書と呼ばれる手法が使われることがある。この並行読書には、様々な目的があるが、そのうちの一つに、同じ作家

の作品を読み、作家の書きぶりや他の作品の類似から共通のテーマを知るためのものがある。一つの作品だけでは味わうことができないものを子どもたちに気づかせたい場合、有効な方法だと考えている。並行読書を用いる目的は他にもあるが、ここで述べている目的は、「作家史」を知るという大きなまとまりの中の一つだと言えると考えている。低学年や中学年では、「作家史」を知ることは難しく、子どもたちの自由な発想や想像の弊害になるかもしれない。しかし、並行読書は、「作家」というものを意識させる取り組みであり、そこには「作家史」につながるものを低学年の段階から子どもたちに学ばせていると考えている。本実践では、「作家史」と関連させた読みを行うのだが、並行読書の視点を本実践にも取り入れたいと考え、並行読書が身近にできる作家を選んだ。

2つ目は、作品と関連する「作家史」が教材として教科書に掲載されていることだった。「作家史」を調べる際に、インターネットを活用することで多くの情報を瞬時に得ることができる。その中から、課題と情報をつなげることは情報の活用であり、これからの子どもたちに身につけさせたい力となるのだが、本実践では、国語科としてこの2作品を扱う上で、学級の子ども全員が共通の資料を用いることができるようにしたいと考えた。作品と資料を教材文として扱うことで、教材文をもとに話し合いを行う国語科としての読みを大切にしたい。また、教材文を共有することでどの子にとっても安心できる学びの場になるのではと考えた。

国語科を通して、「作家史」と関連させることで

新たな気づきや、問題の解決をすることができれば、「作家史」との関連で作品を解釈する価値や必要性が生まれ、他の作品と出合った際に国語科で学習した見方考え方を活用する子どもが育つと考えた。

### 3. 研究の実際

#### 3. 1. 「せんねんまんねん」まどみちお

本実践で大切にしたいことは、「作家史」と関連させた読みを目的とはしないことであった。あくまでも、「作家史」と関連させた読みは手段であり、課題解決の上で重要なものであることを子どもたちに感じさせたいと思っていた。そうすることが、実感を伴い、汎用性をもつ読みにつながると考えた。

そのために、導入では作者に興味をもたせることや、関連させたい資料と課題とのつながりを意識し単元を設定した。

導入では、詩の作者であるまどみちおの生き方や考え方を知るところから始めた。そうすることで、作品を読み取る際にも無意識のうちに子どもたちは、知っている情報との関連を始めるのではないかと考えた。子どもには資料として同じ作者の随筆の一部を読ませた。(資料:光村図書小学校国語学習指導書 創造 上「宇宙の永遠の中、みんな「今ここ」を生きている」まどみちお) この中で、目に見ることができ「今」という一瞬一瞬と、無限に続く「今」のトータルである自覚的に見ることができないものについて述べている。時間というもの、だからこそ心を揺さぶるとも書かれている。子どもたちにとっては、どこからともなく積もっていくホコリに対して、作者が「ごころうさん」と言いたくなるという事例がわかりやすく、作者の考え方のおもしろさや時間の流れが心を揺さぶるものとして捉えやすい例となっていた。

【単元計画】(全3時間)

- ①まどみちおさんの、物事の見方考え方を読もう。
- ②詩「せんねんまんねん」で伝えたかったことはなんだろう。
- ③題名と最後の2行はどうして平仮名なのだろう。

【授業の様子】

「題名と最後の二行がどうして平仮名？」という課題で授業を行った。子どもたちは、題名の平仮名よりも、最後の二行が平仮名で書かれていることに着目し、自分の考えを発表していった。

さくら：平仮名の方が、優しい感じがする。  
 ここみ：「はるなつあきふゆ」を「春夏秋冬」と書くと「しゅんかしゅうとう」とも読むことができるから、作者は「はるなつあきふゆ」と読んで欲しかったから平仮名で書いた。  
 ひな：最後の二行に作者の伝えたいことがあると思う。説明文でも、最後の筆者の主張が描かれ

ることがよくある。だから、この詩も最後が大事なんだと思う。そんな大事な二行だから1年生にもわかるように平仮名にしたのかなと思う。

みき：「春」って書くと、みんなの頭の中に浮かぶものは同じ「春」だけど、平仮名で「はる」と書くと、いろいろな「はる」が想像できる。  
 こうたろう：僕も似ていて、漢字で書くと意味が固定されてしまうからかなと思う。

みき：作者は、時間の流れとか繋がりとかが大事にしている。積もっていくホコリにもご苦労さんって思うぐらい。だから、「春夏秋冬」って漢字で書くと、春、夏、秋、冬って言葉が分かれている感じがして、あんまり時間がつながっている感じがしない。平仮名の方が文字の切れ目がわかりにくくて、季節が連続つながっているような気がする。

漢字では一字一字に意味があり、一字一字が途切れて読めてしまうイメージ。平仮名にすることで文字同士の切れ目が曖昧になり途切れることがなく繋がっているように読めるイメージ。これらの考えは、作者がホコリにも愛着をもち、時間の積み重ね、長い時間によって生み出されるものに対する愛着があることと関連させて出た意見だった。「作家史」を学ばず、作品のみでの読み取りを行った場合でもこの考えに至る子は出たかもしれない。しかし、子どもたちに新たな読みの視点として出合わせることを目的として行った実践だったので、子どもたちにとっても「作家史」と関連させることで、もっと作品について深く考えることができるのではないかという見通しをもつことができるきっかけになった。また、並行読書をし、膨大な情報の中から作者の意図を読み取るのではなく、教師が意図的に読み取らせたい部分、関連させたい部分を抽出した資料を与えることで、子どもにとって共有しやすく、短時間で学習のねらいを達成することができた。

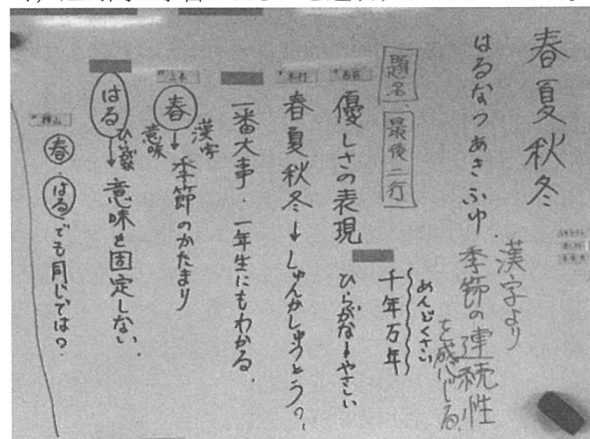


図1：実際の板書の一部

#### 3. 2. 「やまなし」宮沢賢治

宮沢賢治の物語「やまなし」と、資料として添えられている宮沢賢治の伝記「イーハトーヴの夢(畑山博)」が教材として位置付けられている。

「やまなし」は、比喩表現や擬声語・擬態語など宮沢賢治の独特な表現が使われた幻想的な作品である。対比的に描かれる2枚の幻灯は、子どものイメージを膨らませ、作品の世界に浸ることができる。しかし、このような優れた作者の表現方法や、作品を通して描かれている作者の想いが子どもにとって読み取り、理解することを困難にしている一面もあるのではと考えている。

「イーハトーヴの夢」には、筆者である畑山博が、小学生向けに書き下ろしたもので、作者の生い立ちや作者の生き方、作者の理想や願いが描かれ、作者の物事の見方考え方にも触れることができる。

本実践では、伝記「イーハトーヴの夢」を共通の「作家史」として扱う。「作家史」を読み取り、作者の物事の見方考え方を知ることで、作者が「やまなし」を通して表現したかったことを「作家史」と関連させ、見方を変えながら自分なりの読みをもつことができるのではないかと考えた。

作品の読み取りだけでは納得することができない問題を「作家史」と関連させ、自分なりの解釈をもつことで問題を解決する喜びや、資料を読み見方を変えることで作品への新たな気づきが生まれる感動を経験させることで、「作家史」と関連させることで作品をより深く読むことができる実感をもたせたいと考えた。

また、単元の終わりには、これまでに学習した教科書の文学作品を「作家史」と関連させて読み直し、新たな気づきをまとめる活用場面を設定した。これまでの国語学習では、作品だけの読み取りか、並行読書として別の作品との関連で読み取ってきたと考えられるものを、新たに獲得した読みの力で再考させ、「作家史」と関連させて作品を読むことが作品を理解することにとって有効であることが実感できる活動になるのではないかと考えた。その経験が、国語科だけではなく、音楽家や図工科での作品の鑑賞でも生かされるのではないかと考えている。

#### 【単元計画】(全11時間)

第1次「作家史」から宮沢賢治を知る。

- ①「イーハトーヴの夢」の初発の感想を書く。
  - ②宮沢賢治の「物事の見方・考え方」を読む。
- 第2次「作家史」と関連させて「やまなし」を読む。
- ③「やまなし」の初発の感想を書く。
  - ④作品の構造について読む。
  - ⑤「五月」の谷川の様子を読む。
  - ⑥「十二月」の谷川の様子を読む。
  - ⑦「五月」と「十二月」の谷川の様子を比較する。
  - ⑧題名から作者の想いを読む。

第3次「作家史」と関連させて既習の文学作品を読む。

⑨既習の文学作品を選び、「作家史」を調べ、作者の物事の見方や考え方を知る。

⑩⑪「作家史」と関連させ、感想文を書く。

#### 【授業の様子】

「賢治が題名に込めた想いとは、どうして『やまなし』という題名なのだろう？」を学習の課題とした授業の1場面である。子どもたちは、「イーハトーヴの夢」に書かれている内容と「やまなし」とを関連させ、自分なりの読みを交流していった。この授業までに、学級での話し合いでは、「五月」は「恐怖」のイメージがあり、「十二月」には「安心」のイメージがあることを話し合っていた。この授業では、「五月」のクラムボンや魚にとっての「死＝恐怖」だけではなく、「十二月」にもやまなしにとっての「死＝未来につながる」があることを読み取らせたいと考えた。

T:「五月」は恐怖のイメージって話していたけど、それはどうして？

りさ:空からカワセミが落ちてきて、魚をとっていったから。鳥が魚を取るって、食べるためだから、命がなくなるってことだから。

きみ:ここでは、かばの花びらも流れていく。これって、花にとっても死んでいるってことだと思う。花が散ることは花が死ぬこと。作者は、妹のトシさんを亡くしてて、私の考えやけど、カニは賢治で、魚はトシ、カワセミが病氣なんじゃないかな。

そうたろう:賢治の生きた時代には戦争があって、かばの花びらが流れていくのは、戦争で亡くなった人のことを表しているのかと思う。

T:「十二月」の安心のイメージは、どこからそう考えた？

れい:「五月」とは違って、「十二月」では空からやまなしが落ちてくる。カニにとってやまなしは、いい匂いがするお酒になる。だから、初めは空から何か来たから「五月」のときみたいに怖いものと思ったけど、あとで安心に変わるから安心のイメージだと思う。

しゅん:やまなしが落ちてきたことと、トシの死が繋がっているのかな？

きみ:きっと、賢治もトシが死んでしまって落ち込んだけど、ずっと落ち込んでいるわけにはいかないから立ち直ったと思う。それが、初めは恐怖でその後安心になってるんじゃないかと思う。

そうたろう:「十二月」では、水晶のつぶや金雲母のかけらが流れてくる。これは、賢治の平和を願う気持ちだと思う。

ただのぶ:作者はこの物語をハッピーエンドにしたかったから「やまなし」を題名にしたのかな。

T：みんなは「五月」に死があって恐怖のイメージ、「十二月」には安心のイメージって言ってるよね。でも、先生は「十二月」にも「死」があると思うんよね。さっき、きみちゃんも言ってたけど、かばの花びらが散るのも「死」なんだよね。それなら、「十二月」のやまなしが落ちるのもやまなしにとっての「死」なんじゃないの？

(C：口々に反対意見)

ただのぶ：それは「いい死」と「悲しい死」があるやん。

T：それってどういうこと？ みんなわかる？

ただのぶ：「悲しい死」は普通の死やん。

C：普通の死って何？

ただのぶ：みんなも家族とか亡くなったら悲しいやん。

T：じゃあ、やまなしが落ちることも普通の死で悲しい死になるんじゃないの？

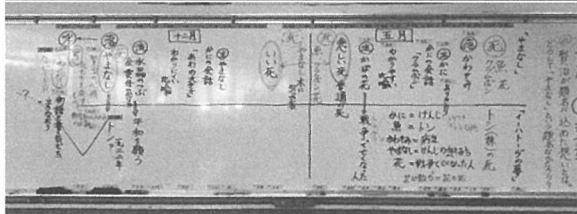


図2：実際の板書

授業では、「いい死」「悲しい死」のところを深めることができず終了した。次の授業では、「いい死」「悲しい死」に焦点を当て話し合いを行った。やまなしの死は、カニにとって幸福な死であることが子どもたちから出た。子どもたちの考えは、立場によって死にも「いい死」「悲しい死」があるというものだった。そこで、教師から「五月」の死は突然の死、「十二月」の死は寿命による死ではないかと話した。本来ならば、子どもたちに気づかせたいものだったが、子どもたちに気づかせるためのしかけが不十分であり、教師から示すことになった。しかし、子どもたちは教師からの言葉をもとに「作家史」との関連をさせていった。その中には、作品を読むだけでは感じるできないものがあり、「作家史」と関連させることで本実践でねらっている読みの視点が育まれていることを感じる事ができた。

#### 【子どもたちの考え】

- ・トシの死は、病気の死だったから賢治は寿命で亡くなるよりも悲しかった。
- ・トシにも、長生きして欲しかった。
- ・突然、トシの命が奪われた感じになった。カワセミは病気？
- ・賢治が題名を「やまなし」にしたのは、誰かにとってはいい死もあるということを伝えたかったから。
- ・「五月」は、「イーハトーヴの夢」と関連するところがあつたけど、「十二月」にはあまりなかった。「十二月」は賢治の理想だから、「作家史」とはつながら

ない。

#### 4. 成果と課題

本実践を通して、子どもたちは「作家史」と関連させて作品の読み取りを行った。これまでにおそらく経験したことのない活動だったと思うのだが、子どもたちは興味をもって作家について調べ、作品とのつながりを見つけていることができると新たな発見を純粋に喜び、伝え合い、聞き合う姿を見ることができた。それは、自分自身がこれまで子どもたちと行ってきたありきたりな国語科の読み取りではなく、子どもたちにとって挑戦してみたい、面白そうと思わせることができるものだったと感じている。「やまなし」の学習後、学校近くの美術館へ図工科として絵画の鑑賞学習を行う機会があった。「やまなし」の学習が終わってから時間は経過していたが、子ども同士の話の中には、「この作者、戦争を経験してるな。だから、暗い色彩で空を描いているのかもしれない。」や、「この作者は、田舎の方の出身みたい。だから、農作業を行っている人たちの姿をこれほどリアルに描けるのかも。」などの声を聞くことができた。今回の鑑賞で得られる作家史の情報は少なかつたのだが、国語科で学習した読みの力が活かされていると感じた。タブレットを携帯させ、もっと作家史を調べることができる状況を教師が設定していれば、子どもたちの鑑賞は新たな視点が見られたと思うので、定着を図るための意図的なきかけが必要だったと感じている。

「作家史」として扱う資料については反省と課題が多い。詩「せんねんまんねん」で扱った資料は、作者の随筆の中からの抜粋なのだが、指導書が作品との関連をもとに抜粋している部分だったので、当然内容的に作者の見方考え方と関連がある文章だった。学習の導入部分として、子どもに見通しをもたせるために有効だと思つてのことだが、本当に子どもたちがこれから「作家史」と関連させる場合には、作品のために関連をもたせて書かれている資料と出合うことは少ない。インターネットなどの膨大な作家の情報の中から見つけ出すことは本実践では行うことができなかった。これは「やまなし」における資料である「イーハトーヴの夢」でも同様のことが言える。また、「イーハトーヴの夢」は教科書にも読み取るための教材としてあるのだが、あくまでもこの筆者は畑山博であり、宮沢賢治の見方考え方を畑山博のフィルターを通して書かれた資料であった。これが、本当に子どもたちにとって「やまなし」を読み取るための「作家史」の資料となつたのかは、これからも検証を行う必要があるのではと考えている。

#### 参考文献

文部科学省 小学校学習指導要領解説 国語編  
松本修 (2015) 読みの交流と言語活動 玉川大学出版部